

盤山に集った清初文人(宋榮・王士禛・朱彝尊・洪昇)と智朴『盤山志』について

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/1178>

出版情報 : 文學研究. 99, pp.1-24, 2002-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :



盤山に集った清初文人（宋犛・王士禛・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について

竹 村 則 行

一 はじめに

北京東方約八十キロメートル、天津北方約百キロメートル、更には天津燕島の西北方約十二キロメートルの位置に盤山がある。海拔八六四メートルの主峰挂月峰を擁し、燕山山脈の一角を占める平均海拔約五百メートルの山塊群である。長安における華山、洛陽における嵩山ほどではないにしても、大都市近郊に鎮座する名山の常として、盤山も古来しばしば北京や天津を訪れる文人の山林探勝の目的地となった。この盤山について、恐らくは明清期に全国的に企画遂行された地方志編纂の事業と密接に関連して、その地理・歴史・物産・名勝・人物・詩文等について総合的且つ体系的に資料を集成した『盤山志』が二種類現存する。

『盤山志』といえ、今日普通には清・乾隆帝の勅命を受けて蒋溥等が編纂の任に当たった『欽定盤山志』十六巻、首五巻を指すであろう。該書は乾隆十九（一七五四）年の蒋溥等の上奏、および翌乾隆二十（一七五五）年の乾隆帝の序を有しており、『四庫全書』史部に収録する。該書は『盤山志・西湖志纂』⁽¹⁾ 『欽定盤山志』⁽²⁾ 等の影印刊本もあり、

盤山に集った清初文人（宋犛・王士禛・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について

盤山に集った清初文人（宋犖・王士禛・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について

今日通行本として広く流通している。この『欽定盤山志』の構成は次の通りである。

首一卷 康熙・乾隆帝の盤山巡遊年月目録

首二～五卷 聖祖仁皇帝（康熙帝）および乾隆帝の盤山関連御製詩

卷一～二 図 卷八～九 方外

卷三～四 名勝 卷十～十四 芸文

卷五～六 寺宇 卷十五 物産

卷七 流寓 卷十六 雜綴

康熙帝、乾隆帝はじめ清朝の皇族がしばしば盤山に立ち寄った理由は、盤山の景勝もさることながら、北京東郊のこの地が、満州族祖廟のある瀋陽への往復の途上に位置していることも大きな要因であった。『欽定盤山志』巻首一に、「国朝定鼎するや、北平の盤山は陵寢に上るに經由するの道と為れり」と述べる通りである。盤山には、康熙帝創建にかかる静寄山荘をはじめとして、康熙と乾隆帝の関連施設、及び関連詩文等が数多く存在する。従って、絶大な皇帝権力を駆使してこれらの記録や詩文を総合的体系的に彙集した『欽定盤山志』は、両皇帝の関連詩文・事績を含んで、盤山に関わる百科全書的な記録集としての価値を有するものであり、今日においてもその有用性を失わない実用地理書であるといえる。

ところが、実は『盤山志』には、これ以前に清初の私撰にかかる『盤山志』が存在する。即ち、釈智朴撰『盤山志』十卷・補遺四卷がそれであり、康熙三十五（一六九六）年序刊、つまり『欽定盤山志』から半世紀も前に編まれた盤山に関する百科地理書である。この書の内容構成は、

巻首 序其の他 巻六 遊幸、附文部（魏晉～清朝）

巻一 名勝 巻七 詩部（唐・金・元・明）

卷二、三 人物 卷八、九 詩部（清朝）

卷四 建置 卷十 方外

卷五 物産 補遺 文部・詩部・雜綴

となっており、『欽定盤山志』とは別の視点に立って関連する資料を収載して、盤山に関する総合的な知識が得られるようになってきている。

撰者の智朴は康熙十（一六七二）年に盤山の青溝に盤谷寺（青溝禅院）を開いた詩僧であるが、この『盤山志』を編いて特に興味を惹かれるのは、康熙の初期に智朴と交友があり、屢しばしばば盤山を訪れて智朴と頻繁に交流し、且つ『盤山志』中に多数の詩文記録を載せる清初期の著名な文人の群像である。即ち、『盤山志』の較訂者として名を連ねる者に王士禎と朱彝尊がおり、『盤山志』に序文を寄せる者に、王士禎に加えて王澤弘や宋犖、高士奇等々が名を連ね、清初期における北方文壇の錚々たる文人名がこの『盤山志』中に綺羅星のように瞬いているのである。一体、彼らはこの盤山を拠点にして、智朴と、或いは文人同士どのような交友関係を結び、またそれは清初期の文壇においてどのような意味を持っているのだろうか。更には五十数年後に新たに編纂された『欽定盤山志』と比較して、私撰『盤山志』の価値はどのようなものであるのか。幾つかの興味あるテーマについて、十分に考察した先行研究がまだ管見に入っていない現状に鑑みて、本稿では、まずは『盤山志』の成立や内容をめぐる基礎的な事実の解明から着手したいと考える。

智朴撰『盤山志』十巻は、巻首に王澤弘、王士禎、宋犖、高士奇、張朝琮、鄭纘祖の序文、および智朴の自序を載せ、³続いて前掲の巻一から巻十、及び補遺に至る関連詩文をテーマ別に収録するが、次には、智朴の自序、凡例について少しく検討したい。智朴の「盤山志自序」に、

康熙辛亥秋、朴結茅盤谷、為終老計。（康熙辛亥（十、一六七一年）の秋、（智）朴、茅を盤谷に結び、終老の計

盤山に集った清初文人（宋犖・王士禎・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について

を為す。）

とあることから、智朴が盤山の盤谷に茅庵（後の盤谷寺）を結んで終の棲家としたのは、清朝の国家基盤も漸く安定しつつあった康熙十（一六七二）年の秋であったことが分かる。また、王士禛の「盤山志序」に、

青溝拙菴大師撰盤山志、閱九寒暑、至是書成、而俾予序之。（青溝拙菴大師の『盤山志』を撰するや、九の寒暑を閲し、是に至りて書成りて、予をして之に序せしむ。）

とあり、宋犛や張朝琮、鄭纘祖の序文も同様に述べるところから、『盤山志』は完成までに都合九年の歳月を費やしたことが判明する。そして、智朴の「盤山志自序」には、

甲子春、宋牧仲觀察過訪山中、以此謀之。（甲子（一六八四康熙二十三年）春、宋牧仲觀察（犛）山中に過訪し、此（引用者注…『盤山志』編纂の構想）を以て之を謀る。）

とあることからすると、実際に『盤山志』編纂の構想が立てられたのは康熙二十（一六八四）年であった。そして、それから九年の歳月を経た康熙三十一年（一六九三）年に、王士禛や朱彝尊の較訂を加えた『盤山志』が刊行されたことになる。『盤山志』の序は数名の著名な文人が撰しているが、中でも宋犛の「盤山志序」は最も正確な紀年をも有するものである。『盤山志補遺』の凡例に、

康熙癸酉春、『山志』繡梓事竣。（康熙癸酉（三十二、一六九三年）、『（盤）山志』繡梓の事竣^{おわ}。）とあるのは、この年に『盤山志』を出版したことの証言である。⁽⁴⁾

二 宋犛と『盤山志』

以下には、盤山を拠点として智朴と交友のあった清初の代表的文人の群像を、略伝と幾つかの詩篇を解析しながら

ら紹介することにする。

宋犖（一六三四崇禎七―一七二三康熙五十二年、享年八十歳）は字は牧仲、号は漫堂、また綿津山人、河南商丘の人。年十四で大臣の子という御陰で以て宮中に入り、その後、黄州府通判、貴州司員外郎、福建司郎中、江蘇布政使、江寧巡撫、吏部尚書等を歴任した。清初の大詩人王士禛（一六三四―一七二一）とは同年の生、且つ二年遅れの死であったが、二人は生前に頻繁に交友を重ねた。その詩名も当時において並称されたが、洪亮吉『北方詩話』卷六は、宋犖を同時期の趙秋谷とも比較しつつ、

宋豈止不及王、亦并不及秋谷也。（宋（犖）は豈に王（士禛）に及ばざるに止まらんや、亦た并^けして（趙）秋谷にも及ばざるなり。）

とする。宋犖の著作に『綿津山人詩集』『楓香詞』『漫堂說詩』等がある。晩年には『西陂類稿』を自訂し、前著に合わせて文集も組み入れている。『西陂類稿』三十九卷は『四庫全書』集部別集類に収録される。

同時期の他の詩人と同様に、宋犖の生涯で特徴的なのはその交友の広さである。例えば『綿津山人詩集』に序を寄せた詩人名だけをあげても、

汪琬（二序）・王鐸・侯方域・張自烈・吳偉業・高珩・

王士禛（三序）・湯斌・尤侗・邵長蘅・馮景・朱彝尊

らの、清初文壇を代表する文人がずらりと並ぶ。近人袁行雲『清人詩集叙録』⁵卷十「綿津山人詩集二十四卷」提要は「好延文士、為吳中風雅總持」（好く文士を延^びき、吳中の風雅の總持と為る）と述べるが、宋犖がこの時期、これらの文人と共に清初文壇の重要なメンバーであったことは間違いないであろう。

その宋犖が首都東郊の盤山を訪れ、智朴の『盤山志』編纂の構想に参与したのは、先述の智朴序に拠れば、一六八四康熙二十三年春のことであり、それから九年後、遂に『盤山志』の刊行を見ることになる。してみれば、宋犖

は智朴との交友を通して『盤山志』の完成に計画当初から深く関わった文人であったということになる。ここでは、その宋犖が盤山の智朴の拙庵を詠んだ「重遊盤山七首」其五⁽⁶⁾について紹介することにする。

昔余吟五字 昔余^{われ}五字を吟じ

幽賞企青溝 幽賞 青溝を企^はらんとし

凌風越西嶺 風を凌ぎ 西嶺を越え

攔入麋鹿遊 麋鹿の遊ぶに攔^さり入る

谷口訪邃洞 谷口に 邃^ふき洞を訪ねれば

門閉巨石留 門は閉ぢ 巨石のみ留まりてあり

何時名將軍 何れの時の名將軍ならん

古蘚纏兜整 古^こき蘚 兜^{かぶと}整に纏^{まと}へり

異鳥静相語 異鳥 静かに相語り

聲比山呼^{鳥名優} 声は山呼（鳥名）に比べて優なり

松鼠竄窳窳 松鼠は窳^{ふかあな}窳^{かく}に竄れ

豎尾招其儔 尾を豎^{たて}て 其の儔^{なかま}を招けり

顧盼幽叢薄 顧^{かえりみ}盼^みれば 叢薄^{おくふか}は幽^く

花宮臨荒陬 花宮^{てら}は荒陬に臨めり

茅屋八九間 茅屋 八九間

彈琴藏湯休 琴を弾じて 湯休^{かく}藏れたり

新詩感祭酒謂阮亭 新詩 (王士禛) 祭首を感ぜしむ (阮亭を謂ふ)

奚啻珊瑚鈎 奚ぞ啻に珊瑚鈎のみならんや

黄精潤齒頰 黄精に 齒頰潤ひ

名畫清人眸 觀趙文敏 寶牖圖 名画 人眸清やかなり (趙文敏の寶牖圖を觀る)

幾年緝山志 幾年も (盤) 山志を緝め

往牒窮冥搜 往の牒 冥搜を窮む

遺世幸同調 世を遺つるに 幸いに同調するものあれば

矢口談莊周 口を矢ねて 莊周を談ず

誰謂白蓮社 誰か白蓮社と謂はん

高風獨千秋 此首爲 拙庵賦 高風 千秋に独んず (此の首は拙庵《智朴》の為に賦せり)

以下、各詩句の語釈は次の通り。「青溝」は拙庵智朴の盤谷寺があつた地名。「花宮」は寺宇のこと。「湯休」は南朝末の名僧惠休。智朴に喩えた。「珊瑚鈎」は智朴の詩才を賛美した表現。王士禛と智朴の交友については次節に検討する。「黄精」は藥草の名。『盤山志』卷五物産参照。第二十句の注「趙文敏」は元の名画家趙孟頫、字は子昂、号は松雪老人のこと。その「寶牖圖」については、明・趙琦美『趙氏鉄網珊瑚』卷十二「寶牖圖」に、「右、子夏見原憲図。要見貧無諛、富無驕之意。」(右は子夏、原憲に見ふの図。要は貧に見ひて諛ふ無く、富あるも驕る無からんの意なり)とある。「往牒」は古記録、古文書。ここは盤山に関する古文書をいう。「白蓮社」は晋の惠遠が廬山の虎溪東林寺に開いた宗教結社の名。盤山の智朴とその友人の結社に喩える。

この詩を通して、盤山に隱遁する僧智朴の清雅な生活ぶり、及び青溝にある拙庵の簡素なたたずまい等が如実に伝わってくる。これ以外の関連詩の紹介を省略するが、宋犖にはこの詩以前に「盤山詩六首」があり、宋犖と盤山

盤山に集った清初文人（宋犛・王士禛・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について

智朴の交友の長さや深さを窺わせる。智朴が既に『盤山志』の編輯に着手していることを述べるこの詩は、「重遊盤山七首」という詩題が示す通り、宋犛の盤山再訪時の作品と思われる。

三 王士禛と『盤山志』

王士禛（一六三四—一七一）、字は貽上、号は阮亭、また漁洋山人が、次節に述べる朱彝尊と並んで清初文壇を代表する文人であることは言うまでもない。本節は、これまで注目されなかった王士禛と智朴『盤山志』の関係に限って論述することにし、王士禛研究の一端に資することを目的とする。

王士禛と智朴の交友が初めて記録されるのは、『帶經堂集』卷三十一、『漁洋統詩集』卷九「丙辰稿」（一六七六康熙十五年、時に王士禛四十三歳）に輯録される「答盤山拙上人寄電光・雲鶴諸集」詩である。⁽⁸⁾

曹溪遊萬里 曹溪 万里に遊び

酌水問南能 水を酌み 南能に問ふ

世界隨縁住 世界 縁に随って住し

人天最上乘 人天 最上乘

蕭然白足侶 蕭然たり 白足の侶

不作紫衣僧 紫衣の僧と作らずして

寄我新吟卷 我に新吟の卷を寄す

清凉五月冰時自五
臺歸 清凉なり 五月の冰（時に五台より帰る）

「曹溪」は曹溪宝林寺に禅宗南州府を開いた六祖慧能に因む。次句「南能」も同様に慧能を指し、盤山の智朴に喩

える。この詩を読めば、康熙十五年、即ち盤山に居を定めて五年後の智朴が、当時北京にあった王士禛に自撰詩集《電光》《雲鶴》集を寄せたことから、二人の交友が始まったことが分かる。⁽⁹⁾この詩において、王士禛は智朴の新詩について、「清涼五月冰」の語を以て評する。終聯「我に新吟の巻を寄す」とは、先に挙げた宋肇詩に「新詩（王）祭酒を感じしむ」という表現の元になった、智朴から王士禛への新作詩集の寄贈を指すものと思われる。

次に、王士禛が智朴の『盤山志』を校訂し終わって智朴に寄せた「較『盤山志』竟、寄拙菴禪師」詩⁽¹⁰⁾を掲げる。

選佛場非遠 選仏場は遠きに非ず

青溝講席開 青溝に講席の開くあり

常言行脚去 常に行脚し去くと言はば

何日打包來 何れの日か 打包して来らん

彌勒同龕處 彌勒 龕を同じくする処

英雄舞劍臺 英雄 劍を舞する台

薊門春樹裏 薊門 春樹の裏^{うち}

東望興悠哉^{盤山有李衛公舞劍臺} 東のかたを望めば 興 悠かなり（盤山に李衛公の舞劍台有り）

初句「選佛場」は唐・天然禪師の故事に基づき、広く仏寺を指す。「打包」は「行脚」と同じく、包み一つだけの雲水僧の姿をいう。康熙三十年の紀年を有する智朴の「盤山志」自述に、

其所未備、彙成質之阮亭・竹垞二公。二公慨然首肯、互爲較訂、遂付雕鐫。（其の未だ備はざる所は、稿成りて、之を阮亭（王士禛）・竹垞（朱彝尊）の二公に質せり。二公慨然として首肯し、互いに較訂を爲し、遂に雕鐫に付す。）

とあるので、王士禛のこの詩は康熙三十（二六九二）年か、その直前の作と考えられる。王士禛はこの詩で、北京に

おいて校訂し終わった『盤山志』稿を前にして、はるか盤山を「東望」しつつ、智朴との交友を回顧しているのである。

この他、『盤山志』巻八や『盤山志補遺』巻一には、王士禎と智朴の交友を示す詩文が多数収められており、両者の親密な交流が窺われるが、これらの中には王士禎『帶經堂集』未収録のものも含まれるので、以下にその題目のみを記録する。

「寄盤山拙公」「蒼盤山拙公見懷」「送宋牧仲之官通潞」「謝拙公惠芝」「題拙公寫眞」「寄拙公」「較盤山志竟賦寄

拙老」「退朝雪中懷拙公」「蒼拙老寄盤山圖」

……………以上『盤山志』巻八

「與青溝和尚書」「又」「又」「又」「又」「又」「又」

……………以上『盤山志補遺』巻一

四 朱彝尊と『盤山志』

朱彝尊（一六二九—一七〇九）は字は錫鬯、号は竹垞、浙江秀水の人。書室を曝書亭、静志居ともいい、『経義考』『日下旧聞』『明詩綜』『詞綜』『曝書亭集』等の著作を残す彼が、前に述べた山東新城の王士禎と並んで、「南朱北王」と並称される清初文壇の代表的存在であったことは言うまでもない。朱彝尊は康熙十八年の博学鴻詞科に挙げられて出仕するが、康熙二十三年に起きた弾劾事件の後、康熙三十一年、六十四歳で竟に辞職するに至るのであり、その清朝出仕の意識にかなりの屈折があったことが推察される⁽¹¹⁾。ここでは、その朱彝尊が王士禎と共に智朴の『盤山志』の校訂に参画した事実を明らかにするために、まずは朱彝尊と智朴の交友の経緯について検討することにする。

朱彝尊と智朴の交友を示す詩として、『盤山志』巻四に朱彝尊詩の断句二首（無題）、巻八に「盤山拙菴大師書來奉報」「寄別拙菴大師」等の詩を収めるが、ここでは朱彝尊の『騰笑集』巻六、また『曝書亭集』巻十四に収める

「朴公書來、招游盤山、却寄」詩を次に挙げる。

三盤勝地稱絶　三盤の勝地は絶を称せられ

衆嶺何峰最尊　衆嶺　何れの峰ぞ最も尊き

別後時勞夢寐　別れて後　時に夢寐を勞するも

書來興轉飛翻　書來れば　興うた轉た飛翻す

青松十里巖磴　青松十里の巖の磴いしだん

紅杏千株寺門　紅杏千株の寺の門

好雇犢車一兩　好し　犢車一兩を雇ひ

軟塵碾到山根　軟塵を碾ひきて　山根に到らん

この六言詩において、朱彝尊は、朴公即ち智朴から盤山への游山を慫慂されたのに対し、嬉しさに小踊りしつつ、牛車を雇って盤山の山麓まで行きたいと返事をしている。詩中に「別後」とあることから、この詩以前にも智朴と朱彝尊の交友があったことが知られる。それは、或いは朱彝尊が初めて盤山の智朴を訪ねた時のことかも知れない。また同じく『騰笑集』卷四の「題盤山朴公畫像二首」其二（『曝書亭集』は卷十四「再簡朴公」）詩には、

謝家木屐無完齒　謝家の木屐に完き齒無く

陶令籃輿怕朔風　陶令の籃輿は朔風を怕る

黄葉滿山來未得　黄葉滿山ならんも　來る（行く）を未だ得ず

幽尋也待杏花紅　幽尋するも　也た杏花の紅はなさくを待たん

と述べて、晩秋初冬の黄葉期の盤山訪問を、杏花咲く来春に延期したい旨を返書している。

朱彝尊と智朴の交友を示す詩文は数多くは残されていないが、二人の交流の最大の成果は、朱彝尊が王士禛と

盤山に集った清初文人（宋肇・王士禛・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について

もに校訂をした『盤山志』である。即ち、宋肇の「盤山志序」に、

拙公來自江右、卓錫茲山、既闢青溝禪院居之。毅然以山志自任、而少司農阮亭王公・太史竹垞朱公實飲助之。凡屢削藁、閱九寒暑而志成。（拙公江右より来り、錫を茲の山に卓て、既に青溝禪院を闢きて之に居る。毅然として『山志』を以て自ら任じて、少司農阮亭王公（士禛）・太史竹垞朱公（彝尊）、実に之を飲助す。凡そ屢ば稿を削り、九の寒暑を閲して『志』成れり。）

とあって、王士禛と朱彝尊とが九年がかりで『盤山志』の校訂に当たったことを記する。このことは、智朴本人の『盤山志』自述にも、

藁成、質之（王）阮亭（朱）竹垞二公、二公慨然首肯、互爲較訂、遂付雕鐫。

と述べ、『盤山志』の原稿成った後に王士禛・朱彝尊の二人が積極的にその校訂に当たったことを回顧する。こうして、今日の『盤山志』は、「盤山智朴纂輯」に併せて「新城王士禛・秀水朱彝尊 較訂」の三名を連記するのであるが、ここからは『盤山志』の成立に関わった王士禛・朱彝尊と智朴との深い交友が見て取れるのである。

五 洪昇と『盤山志』

洪昇（一六四五—一七〇四）、字は昉思、号は稗畦また稗村、浙江錢塘の人。王士禛や朱彝尊とも交友のある清初の文人であり、戯曲に巧みであった。楊貴妃故事に取材した『長生殿』は特に有名で、孔尚任『桃花扇』と並んで清代戯曲の双璧と称せられる。しかし、『長生殿』の流行は却って災禍を招き、晩年は不遇であった。その他詩集に『稗畦集』『嘯月楼集』等があるが、今日それらの著作は『洪昇集』⁽¹²⁾にまとめられる。

さて、盤山をめぐる洪昇と智朴の交友に関しては、『盤山志』中の諸記録のほか、近年章培恒氏の労作『洪昇年

譜』⁽¹³⁾があり、盤山と智朴をめぐる洪昇の履歴について、前三者より詳細に把握できる。それによると、洪昇が盤山に入山し、智朴に面会するのは康熙二十(一六八一)年、洪昇三十七歳時である。時に洪昇が王澤弘と共に盤山に赴くと、宋肇が先に到着しており、三人は遊山を記念して詩作を残している(『洪昇年譜』二〇四頁)。そして、洪昇と盤山及び智朴との関係で特に注目されるのは、康熙二十八(一六八九)年、洪昇四十五歳時の記事である。即ち、この年洪昇は、一時に大流行した『長生殿』を皇后の喪中に上演したという理由で弾劾を受け、国学生的身分を剥奪されるという災禍に遭遇するのである。その事実内容は章培恒氏『洪昇年譜』に詳しい。この時、恐らくは洪昇が胸中に鬱積する無念の思いを晴らす為もあって、盤山の智朴師のもとを訪れたことは、『盤山志』卷四「青溝禅院」項に載録する次詩(詩題不詳。以下の举例では智朴について述べた終盤八句を省略)に明らかである。

苦爲塵情累

苦はなはだ塵情うきよの爲わざらに累つらはされ

蹉跎踰半生

蹉跎して半生を踰こえんとす

譬如蛛作網

譬へば蛛くもの網を作り

吐絲自纏縈

糸を吐きて自ら纏まとひ縈からむが如し

家食不自給

家食 自給せず

誤入長安城

誤りて長安城(北京)に入る

僂俛従時趨

僂俛として時趨に従い

面熱中憤盈

面は熱く中こころに憤り盈みつ

學殖漸以隳

学殖は漸く以て隳くじけ

神智昏如醒

神智は昏として醒わるするが如し

世俗憎兀傲

世俗は兀傲を憎み

遂爲禍所嬰 遂に禍の嬰る所と為れり

この詩において、洪昇は自ら吐いた糸に絡まる蜘蛛に喩え、「兀傲」（おごりたかぶ）る自分が世間の指弾を受けて「禍」に罹ったことを憤慨するが、これは『長生殿』の流行とその後に惹起した弾劾事件を直接に指すものである。この詩には、洪昇が盤山の風景や智朴との交友を詠んだその他の詩とは違い、世間に相容れない洪昇の苦衷が吐露されているが、その最大の理由はこの詩の直前に起こった『長生殿』をめぐる災禍事件であろうと思われる。とすれば、その直後に盤山を訪れて智朴に対面した洪昇は、長安（北京）での余りにも深い心の傷を癒すことが最大の目的であったことが推察されるのである。

この詩のほかにも、洪昇と盤山や智朴との関わりを示す詩文は、『盤山志』や『洪昇集』に計二十五首収録されている。紙幅の関係から、その他の詩例を省略するが、洪昇もまた、宋犖や王士禛、朱彝尊等と並んで、盤山や智朴をめぐる清朝初期の重要な文人であったことは間違いない。

六 智朴と『盤山志』

方外の人である釈智朴（一六三五―？）に関する伝記記述は数多くない。その中で、ここでは比較的まとまったものとして、『光緒順天府志』⁽¹⁴⁾巻一一三、釈道の項に、『蘇州沈志』を引用する次の記事を掲げる。

智樸、號拙菴、張姓、江南徐州人。母王氏、得異夢而生。自幼穎異、年十五歲爲僧、深禪機。三十五歲至盤山、結廬於青溝。其地間多虎豹、樵夫不敢入、自智樸開山結茅之後、惡獸潛踪。人咸異之、名遂大振。盤山向無志乘、智樸編輯成書。^{蘇州沈志}（智朴は号拙庵、張姓、江南徐州の人。母王氏、異夢を得て生まる。幼より穎異、年十五歳にして僧と為り、禪機に深し。三十五歳にして盤山に至り、廬を青溝に結ぶ。其の地は間（閑）にして虎

豹多く、樵夫は敢えて入らざるも、智朴の開山して茅を結びての後、悪獸踪あつとを潜む。人は威みな之を異とし、名遂に大いに振ふ。盤山さんに向まむに志乗無ければ、智朴編輯して書を成す。(蘇州沈志)

この記事から、智樸(朴)は俗姓は張、江南徐州の人。僧侶となったのが十五歳、盤山に入山して盤谷青溝に廬を結んだのは三十五歳時であったことが判明する。先に挙げた智朴の「盤山志自序」には「康熙辛亥秋、朴、茅を盤谷に結び、終老の計を為す」とあり、智朴の盤山結廬の年を康熙辛亥(十、一六七二)年と明記しているので、この年智朴三十五歳とすれば、逆算して、智朴の生年は一六三五(明崇禎八)年であり、彼が剃髪して僧侶になったのは一六四九(清順治六)年であったことが分かる。

また、『欽定盤山志』巻九、方外に載せる智朴伝には、

智朴字拙菴、徐州人。早參諸方、隱匡廬東西二林間。最後得法青龍百愚和尚、實洞宗第三十世。康熙辛亥游盤山、結茅青溝、漸成巨刹。(智朴字は拙庵、徐州の人。早くより諸方に参し、匡廬の東西二林の間に隠る。最後に法を青龍百愚和尚に得たり、実洞宗第三十世なり。康熙辛亥(十、一六七一年)盤山に遊び、茅を青溝に結び、漸く巨刹と成る。)

とあることからすれば、出家してから二十年間の中に、智朴は廬山の東西二林寺においても修行していたことが知られる。

更に智朴が十五歳、即ち一六四九(清順治六)年に出家する以前の記事として注目されるのは、近人徐世昌の『晚晴簃詩匯(15)』巻一九五、智朴の項に見える「詩話」である。

或謂、拙庵實洪文襄麾下士、文襄軍覆、去而爲僧。(或は謂ふ、拙庵は実は洪文襄(疇)麾下の士にして、文襄の軍覆るや、去りて僧と爲ると。)

この記事からは、拙庵智朴は、もと明末の莊烈帝朱由檢に仕えた洪文襄承疇麾下の兵士であり、明清の鼎革を経

て洪承疇軍が敗れると、思う所あって出家したものだという。また、智朴の出自に言及した現代の『中国名勝詞典』⁽¹⁶⁾の次の解説も、恐らくは徐世昌のこの記事を敷衍して成ったものである。

智朴為明末名将、清軍入関後、落髮為僧、隱居寺内、著『盤山志』。（智朴は明末の名将であったが、清軍の入関後は落髮して僧侶となり、（盤谷）寺内に隱居して『盤山志』を著した。）

これらの記事が真実であるとすれば、智朴が盤山に隱棲した経緯、また王士禛や朱彝尊、洪昇等が盤山の智朴と親交を結んだ背景、更には康熙帝が盤山巡幸の折に智朴に横額を賜った故事などが、関係者相互の微妙な心理の陰影を伴って解釈され得るのだが、それらについては、後節のまとめにおいて総括したい。

さて、その智朴の詩作品は、『盤山志』に三十九首、および『盤山志補遺』に三十四首の計七十三首が収められている。その他、『盤山志』編纂に関わった王士禛、朱彝尊、或いは宋犖、洪昇その他の文人の文集にも関連する詩文が散見されるのだが、ここでは、先の第三節に挙げた王士禛の「較『盤山志』」竟、賦寄拙老」詩に次韻して応酬した智朴の「阮亭較『山志』訖、題小照見寄、依韻奉酬」詩（『盤山志補遺』卷三）を次に挙げる。

山林朝市遠 山林は朝市より遠く

懷抱幾時開 懷抱くも 幾時か開かん

昨日因僧去 昨日 僧の去くに因りて

從空墮柬來 空より柬を墮し來れり

苦心煩筆削 苦心して 筆削を煩わせり

作意在巖臺 意を作すは 巖台（盤山）に在り

感激題紅杏 感激す 「紅杏」を題するに

春容我愧哉 「春容」なるを 我 愧じたり

この詩は、王士禎が北京で『盤山志』を較訂し終わり、併せて智朴の「小照」（肖像画）に題詩して送ってくれたのを、智朴が感謝して和韻して「奉酬」したものである。王士禎の原詩は第三節に掲げた「較『盤山志』竟、寄拙禪師」詩、また「紅杏」「春容」の詩語を含む王士禎の詩は、『盤山志』巻八に収める次の「題拙公寫真」詩である。

雲門像裏見春容　紅杏千林一樹松

何日從師聞寶鏡　青溝蘭若子時鐘

智朴は王士禎に応酬した上掲の詩で、「朝市」（北京）で『盤山志』の校訂に当たってくれた王士禎の「苦心」を思いやり、併せて自分の肖像画への題詩に謝意を述べている。王士禎の題詩に「紅杏千林一樹松」とあることから、智朴の盤山青溝にあった盤谷寺は杏の樹林が長くつづき、一本の松の木が聳えていたことが推察される。

次に、盤山での智朴の日常を窺わせるものとして、『盤山志』巻十所収、智朴「盤山雜詩」から二首を引用する。

千章烟樹黄　千章の烟樹は黄にして

萬朶雲山碧　萬朶の雲山は碧し

中有忘形人　中に忘形の人有り

嗒然坐幽石　嗒然として　幽石に坐す

この詩は、全山の樹木が黄葉する秋の盤山を描く。中に、奥深い石に坐して一心に瞑想している「忘形の人」とは智朴自身の投影であろう。

崑下白雲飛　崑下に白雲飛び

崑邊紅葉落　崑辺に紅葉落つ

崑中間散人　崑中の閒散人

旁午飯藜藿　旁午おひるに藜藿を飯す

盤山に集った清初文人（宋榮・王士禛・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について

この詩も前詩と同様、金山紅葉の盤山青溝の盤谷寺の「崑」（いわお）の上で修行する「閒（閑）散人」即ち智朴自身が、昼食に「藜藿」（あかざの若葉）を食するスナップである。

七 まとめ

智朴『盤山志』より五十九年後、乾隆二十（一七五五）年の紀年のある『欽定盤山志』序において、乾隆帝は先行する智朴『盤山志』について次のように評する。

因索智朴志書讀之、嗤其意求博而辭冗。（因りて智朴の志書（引用者注…『盤山志』）を索めて之を読むに、其の意は博きを求むるも、辭は冗に失するを嗤ふ。）

ここで乾隆帝は、智朴『盤山志』の読後感として、「冗辭」（冗舌）の欠点を指摘する。乾隆帝のこの評語は、一方で正当であるかも知れないが、一方では創始者の苦心に対する配慮に欠けた無邪気な皇帝の無分別を露呈するとも言えるであろう。というのは、なるほど乾隆帝の『欽定盤山志』には康熙帝・乾隆帝を含む歴代文人の盤山に関する詩文が満載され、それなりに文雅の香気を放っているとしても、実はそこに収載する詩文・記事の多くが先行する智朴の『盤山志』と重複しており、『欽定盤山志』が成るに当たっては、先行の智朴『盤山志』が手近な資料として参照され、活用された可能性が大きいからである。あまつさえ、康熙二十五年、康熙帝が盤山の盤谷寺に智朴を訪ね、親しく「戸外一峯」の額を賜った故事を斟酌すれば、その孝孫たる乾隆帝の智朴『盤山志』への評価はもう少し格上げしてもよいのではないかと思われる。しかし、所詮は天下万物の一切を掌中にする皇帝の綸言であれば、先の「辭冗」という評語は智朴『盤山志』に長く付き纏って離れないであろう。

ただ、そうであるとしても、『欽定盤山志』は決して智朴『盤山志』をやみくもに否定しようとしているのではな

い。それは、『欽定盤山志』中における智朴や宋肇、朱彝尊、王士禛、洪昇への言及の頻度から見ても明らかである。このことは、実際に編修の任に当たった蒋溥等の方針でもあったのであろうが、康熙・乾隆両帝の関連詩文や事跡を顕彰しようとする『欽定盤山志』が、智朴『盤山志』の基礎の上に立って見栄えよく顕徳碑を建てようとするからには、もとより基礎詩文を多く包含する創始者智朴の『盤山志』を無下に無視できるはずもないのである。

では次に、盤山の智朴と智朴をめぐる清初文人の交友の意味するものについて、考えてみたい。この問題は重要ではあるが、具体的な把握が困難な問題でもあるので、ここでは「盤山」「智朴」「清初文人」の三つのキーワードに絞って考察を進めることにする。

盤山は首都北京の東郊、天津の北方に位置する大都市近郊の名山である。古代の首陽山や唐代の終南山、華山、また歴代の廬山の例を見ても分かるように、大都市近郊の名山が持つ機能の一つは、都会（人間世界）を遠く離れて（但し都会からあまり隔絶はせず、適当な距離を保つのが肝要）、文人に隠居所を提供するものであった。伯夷叔齊や陶淵明の隠棲も、むろん世人の住む都会の喧噪に対する不適合の末に清浄な山里へ別天地を求めたものではあるが、彼らの隠遁行為のもう一つのポイントは、それでもその隠棲地が都をあまり遠く離れない大都市近郊の名山であることであった。隠者といえども、所詮人間世界から完全に隔絶して隠遁することはできなかったのである。唐代以降に記録が多く残される詩人の隠遁行為も、王維や白居易の事跡が明白に物語るように、隠遁の場所は大都市の近郊（乃至は都会の中）であることが必須条件である。その理由は、中国の隠者の場合、恐らく日本のそれとは違い、基本的に隠遁は一時的な仮の輜晦行為であって、多くの隠者が、やがて時勢が変われば、またぞろ新たな出仕を企図していたからである。むろん例外も当然あるであろうが、歴代の隠者の隠遁行為の特徴は、いわば都会の近郊の名山に一時身を隠し、やがて情勢の変化に応じて次の出仕を目論んだことにあるのではないかと筆者は考えている。してみると、北京近郊に位置する盤山も、まさしくこの条件に適合する近世の大都市近郊型の名山で

あったといえる。不明な部分が多い智朴の伝記ではあるが、彼が近くに南京を控える廬山での修行後、北京東郊の盤山を終老の地と定めて拙菴を結んだ時、意図的に北京の近郊を選択したものであろうかは不明であるが、後に朱彝尊や王士禛等の清初文人との交友を考えれば、首都の近郊という地理的な要因は、やはり智朴に甚だ有効に作用したことが認められる。

では次に、盤山に隠棲した智朴、および智朴と親しく交友した著名な清初文人について考えてみることにする。先に挙げたように、徐世昌『晚晴簃詩匯』卷一九九、智朴の項の説明に拠れば、智朴はもと明末武將の麾下の兵士であって抗清運動に与したものであり、主將の洪疇の敗北を契機に僧侶となって隠棲したものだという。この記事の真偽は今となっては確認の仕様がなないが、もし事実を伝えているとすれば、首都の北京近郊の盤山に隠棲した智朴の意識を探る上で少なからぬ示唆を与えてくれるエピソードである。『欽定盤山志』卷首一によると、康熙帝が盤山に智朴を訪ねた事例として、次の二例を記録する。

康熙二十五年十二月一日、幸盤山盤谷寺、賜詩及御書、並勒石建亭。（康熙二十五年十二月一日、盤山の盤谷寺に幸し、詩及び御書を賜ひ、並びに石に勒して亭を建つ。）

康熙四十三年三月十日、幸盤山盤谷寺、有用智朴韻詩一首。（康熙四十三年三月十日、盤山盤谷寺に幸し、智朴の韻を用ふる詩一首有り。）

後者の康熙帝の盤谷寺行幸については、『欽定盤山志』卷首二に「甲申春、謁陵回鑾、路經盤山。有僧智朴呈接駕詩、即用原韻二首」（甲申〔康熙四十二年〕春、陵に謁して回鑾するに、路に盤山を經。僧智朴の接駕詩を呈する有り、即ち原韻を用ふ二首）とあるものであり、康熙帝の盤山行幸に対して智朴が呈出した接駕詩二首に、康熙帝が即座に和韻したものである。これに、宋肇の「青溝禪院碑記」（『盤山志』卷四所収）が述べる、

去年冬、天子駐蹕是山、曾幸青溝蘭若。拙菴親聞玉音、承命口占、經御覽賜宸翰。此尤希世之幸也。…康熙二

十六年丁卯三月。(去年冬(康熙二十五年十二月)、天子是の山(盤山)に駐蹕し、曾て青溝蘭若(寺)に幸す。拙菴親しく玉音を聞き、命を承けて口占すれば、御覽を経て宸翰を賜ふ。此れ尤も希世の幸なり。……康熙二十六年丁卯三月。)

という記事、及び王士禛『居易録』卷二に述べる、

上幸盤山、嘗御書「戶外一峯」四字賜之。(上、盤山に幸し、嘗て「戶外一峯」の四字を御書し、之に賜ふ。)という記事、更には『欽定盤山志』卷九、智朴の項に述べる、

聖祖臨幸青溝蘭若、應制口占、承宸翰之賜。(聖祖(康熙帝)青溝蘭若に臨幸するに、制に応じて口占し、宸翰の賜を承く。)

という記事等を総合して考えれば、康熙帝が盤山の青溝蘭若(盤谷寺)に行幸して、智朴に親しく「戶外一峯」の四字を賜ったのは、康熙二十五(一六八六)年十二月一日であった。この年、康熙帝は十一月に孝陵に謁し、十二月に北京に還御しているのです、その盤山駐蹕は帰郷の途次に当たる。康熙二十五年といえ、智朴が康熙十年に盤谷青溝に拙菴(青溝禅院、後の盤谷寺)を開いてから十五年後に当たる。先の徐世昌の言の如く、智朴の前身が仮に明朝の復辟に努力したものであり、関係者がそのことを把握していたとしても、康熙二十五年のこの時点では、既に清朝の治世は盤石のものとなっており、清朝側も僧侶智朴の出身を云々する必要も無かったのではないか。康熙二十五年の康熙帝の盤山盤谷寺行幸という一事から、清朝の絶対安定という情勢が看取し得るように筆者は思うのである。

さて、それでは、この盤山の智朴のもとに集った宋榮、朱彝尊、王士禛、洪昇等を含む清初文人の群像の意味するものについて、本稿の最後に総括してみたい。

筆者は嘗て「朱彝尊の遺民意識」⁽¹¹⁾「康熙十八年博学鴻詞科と清朝文学の出発」⁽¹⁸⁾と題した拙稿において、清初期に

おける文人の挫折意識について考察した。ここでは、政治上の区切りである一六四五年の明清の鼎革を境にして、錢謙益時に六十四歳、呉偉業時に三十七歳、朱彝尊時に十七歳、王士禎時に十二歳という年齢の差を根底に置きつつ、朱彝尊や王士禎等、人生の主要な活動期を清朝に生きた文人には、清朝への適応行為が顕著であることを比較考察し、そして康熙十八年に実施された博学鴻詞科によって、清朝文学が実質的に開始されたことを論述した。いま、康熙二十三年に企画され、康熙三十二年に刊刻された智朴の『盤山志』に関わった多数の清初文人の群像について考える際にも、基本的にはこの原則が適用できるであろう。（因みに、一六三五崇禎八年生まれの智朴は、一六四五年の鼎革時は十一歳となる。つまり智朴は王士禎より一歳年少である。王士禎と智朴の親密な交友についても、この同年代意識の共有が一層促進させたものと考えられる。）即ち、康熙二十年代は既に清朝の治世は盤石で揺るぎの無いものとなっており、盤山の智朴のもとに集った文人は、智朴も含めて、曾て一昔前の錢謙益や呉偉業がそうであったような、明朝復辟の現実的な可能性は皆無に等しいものとなっており、眼前の現実問題として、如何に清朝の治下に適応して生きてゆくかに多くの文人の精力が注がれたと考えられるのである。

それにしても、都会近郊の隠棲地であることの反映として、盤山もまた、世俗の生活に適応できなかった文人の心の療養地としての機能を有したことは確かである。例えば、朱彝尊が康熙二十三年に起きた弾劾事件を契機にまとめた『騰笑集』（注：「騰笑」とは変節出仕を指弾した孔稚珪の「北山移文」中の語）は康熙二十五年に刊行されているが、この年は恰も康熙帝が盤山盤谷寺に幸じた年である。朱彝尊は王士禎と共に、康熙二十三年に計画され、九年後に刊行された『盤山志』の較訂に当たっているが、朱彝尊における盤山も、当然ながら北京近郊の手軽な心身の療養地としての意味合いがあったことが推察される。また、洪昇の場合、本稿第五節に言及したように、『長生殿』の盛行に起因する弾劾事件と盤山への訪問が重なっているのであり、洪昇が弾劾事件で受けた心の傷を癒すべく盤山に智朴を訪問した構図が明白に見て取れる。その他の文人においても、『盤山志』に序文を寄せた多くの文人を含

め、程度の差こそあれ、智朴や盤山に対して心身の療養所としての意味合いがあったであろうことが推測される。明末或いは清初間もなくであれば、顧炎武が恐らくそうであったように、隠棲に偽装して明朝の復辟を画策する生々しい政治工作が行われた可能性もあるが、清朝の康熙二十年代に入った時代は、既に天下の情勢は安定し、そこに生きる文人の当面の関心事は、如何に清朝治下の現実をよりよく生き抜くかにあったであろう。この意味で、朱彝尊と共に王士禛が『盤山志』の較訂を遂行したのは象徴的な出来事であった。

否、それより何よりも、康熙二十五年十二月に、孝陵墓参のついでとはいえ、康熙帝が親しく盤山の盤谷寺に幸し、智朴に四字を賜ったことが、盤山及び智朴等の関係者も含めて名実共に清朝の治下に組み入れられたことを象徴する鉄証である。そしてそれから六十九年後、智朴の『盤山志』を換骨奪胎して乾隆帝の『欽定盤山志』が蔣溥等の奉勅によって完成するのだが、その結果、智朴の『盤山志』はその存在自体も危うく抹消され、『欽定盤山志』の礎石としての意味は残るとしても、もはや清朝文学史上から忘却されようとしているのである。

注

- (1) 上海古籍出版社、山川風情叢書、一九九三年。
- (2) 『中国仏寺史志彙刊』第二輯（台湾明文書局、一九八〇年）。
- (3) 『盤山志』目録には、更に「報単」「山図」とあるが、本稿が拠った内閣文庫蔵本ではこの二項目を欠く。
- (4) 因みに『盤山志補遺』巻一の最終葉には、出版社として「京都王應憲助刊」の七字を印刻する。
- (5) 文化芸術出版社、一九九四年。
- (6) 『綿津山人詩集』巻十五「漫堂草」所収。筆者架蔵本は康熙四十二年朱彝尊等序刊二十七卷四冊本、また同じく上海古籍書店影刊三十一卷六冊本。
- (7) 『四庫全書』子部所収。
- (8) 伊不聡『王漁洋先生年譜』（山東大学出版社、一九八九年）は、当該詩を康熙十六年丁巳の項に編入する。
- (9) 『電光』《雲鶴》の二集は、或いは智朴の詩文集『盤谷集』所収かと思われるが、未見。

盤山に集った清初文人（宋犛・王士禛・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について

盤山に集った清初文人（宋肇・王士禛・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について

- (10) 『帯経堂集』『蠶尾詩集』卷一所収。
- (11) 拙稿「朱彝尊の遺民意識」、『文学研究』七十七、九州大学文学部、一九八〇年）参照。
- (12) 浙江古籍出版社、一九九二年。
- (13) 上海古籍出版社、一九七九年。
- (14) 清・周家楣・繆荃孫編。北京古籍出版社、一九八七年。
- (15) 北京中国書店、一九八八年、民国十七年版に拠って影印。
- (16) 上海辞書出版社、二〇〇一年版七十七頁、天津薊県、盤谷寺の解説。
- (17) 「拙」 「固拙」は廬山南山に庵を結んだ陶淵明の精神世界を読み解くキーワードである。してみれば、廬山の東西二林寺に修業したとする智朴が「拙庵」と号するのは、直接には陶淵明に淵源すると考えられる。
- (18) 『中国文学論集』九、九州大学中国文学会、一九八〇年。